

氏 名	田 所 理 紗
学位(専攻分野の名称)	博 士 (バイオセラピー学)
学 位 記 番 号	甲 第 701 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 21 日
学 位 論 文 題 目	イヌのグルーミング作業に関する行動生理学的研究
論 文 審 査 委 員	主査 教 授・博士(畜産学) 小 川 博 教 授・獣医学博士 土 田 あさみ 准 教 授・博士(獣医学) 増 田 宏 司 農 学 博 士 大 石 孝 雄*

論文内容の要旨

研究の背景および目的

ヒトとイヌは異種動物でありながらも密接な関係を築き、イヌはヒトの求める様々な目的に沿うように、人為的な選択と交配によって、容姿や習性を多様に変化させてきた。現在、イヌの飼育環境は室外から室内へ移り、室内飼育のイヌは長い時間ヒトと生活を共にしている。ヒトは特に衛生面に気をくばるため、アレルギーの原因となる抜け毛やフケへの対処方法をはじめ、イヌにより媒介されるノミやダニなどによる人獣共通感染症にも気を使わなければならない。飼い主のイヌに対する衛生意識は年々向上しているが、ヒトがイヌへの定期的な手入れを怠ると、皮膚病や重い疾病の発症に繋がる恐れがあり、イヌとヒト両者の健康に影響を及ぼすこととなる。適切なグルーミング(手入れ)は、イヌの容姿や健康のためだけでなく、イヌとの良好な関係維持にとっても重要な課題である。

イヌの健康管理を担う専門家はグルーマーと呼ばれる。イヌの全身を見て、触り、イヌの性格を判断し、個々のイヌに合わせながら自身の行動や手法を変え、そのイヌにあった美容作業を行う。イヌとの接触時間が長くなる職業であるグルーマーは、イヌの行動を見極め、個々のイヌへの対処方法を上手く使い分けてグルーミングしていると考えられるが、これらの背景となるグルーマーによるイヌの行動評価や、グルーミング作業中のイヌの状態とグルーマーのイヌに対する対応法との関連に関する検証はほとんどされていない。本研究では、グルーマーならではの経験に基づくイヌへの接し方や行動特性の見極めに関する情報を解析し、イヌとの理想的な付き合い方の提案に役立てることを目的とした。

I. ペットケア従事者によるイヌの行動特性評価に関する研究

イヌの特性や状態を判断しながら自身の行動や手法を変え対応することが出来るグルーマーの経験に基づくイヌの捉え方に関する情報を得るために、イヌの扱いやすさ又は扱いにくさを左右すると考えられる要素(外貌、犬種および行動特性)に関するアンケート調査を行い、147名のグルーマーから回答を得た。イヌの被毛、サイズ、性別に関しては、グルーマーにとっての扱いやすさ又は扱いにくさを大きく左右する要素であると予測したが、扱いやすいイヌのサイズにおいて小型のイヌを回答した回答者が45.5%と最も多く、被毛と性別については、関係ない(被毛:47.6%, 性別:58.5%)と回答するグルーマーが多かった。扱いにくいと判断された犬種の多くは各種調査により攻撃性、破壊性、無駄吠えなどの傾向が高いとされていた。グルーミング作業に悪影響を及ぼすと考えられる行動特性を示す個体や犬種を多く経験することによって、グルーマーに「扱いにくい」という意識が定着したものと考えられた。また、扱いやすい又は扱いにくいと選択された数種の犬種において、グルーミング経験年数が3年以上と3年未満の回答者間に有意な差が認められた(いずれも χ^2 独立性の検定, $p < 0.05$)。グルーミング経験年数が3年以上の回答者が3年未満の回答者よりも多くの犬種で、扱いやすい又は扱いにくいと判断・回答していることから、経験によってイヌの捉え方が定着し、異なる回答に繋がる傾向にあると考えられた。

グルーマーの経験年数が3年以上の回答者について、扱いやすいイヌの行動特性に対する回答のみが数量化Ⅲ類解析(林の数量化理論)において有効で(累積寄与率60%, 相関係数0.5以上)、大きく変量を反映する軸が2

* 元東京農業大学バイオセラピー学専攻 教授

軸算出された。第1軸は、イヌが「動く」か「おとなしくしている」かを識別する軸と解釈でき、回答者の性別においてもサンプルスコアに有意差（マンホイットニーのU検定、 $p=0.0066$ ）が認められた。男性のグルーマーは好奇心旺盛で活発な傾向のあるイヌを、女性のグルーマーはおとなしく臆病な傾向のあるイヌを、それぞれ扱いやすいイヌと捉える傾向にあった。これらのことから男性グルーマーは、グルーミング作業に対してイヌから明瞭な反応が返ってくることを期待している一方、女性グルーマーは、グルーミング作業に対してイヌが動かないこと、すなわち作業が迅速に終了することを期待していると推定された。

II. グルーミング作業におけるイヌのストレスと作業者の行動との関係

イヌへのグルーミング作業に焦点を当て、グルーミング作業中のイヌの唾液中コルチゾール濃度およびイヌの行動、グルーマーの行動を解析し、それらの関連性を評価した。グルーミング作業はイヌの唾液中コルチゾール濃度を経時的に上昇させ（有意確率 $p<0.001$ ）、設定した唾液採取時間帯において、イヌの唾液中コルチゾール濃度にグルーマーの経験年数による有意な差（ $p<0.01$ ）が認められた。作業時間では3年未満の者が有意に長く（ $p<0.01$ ）、イヌの行動においては「体振り」、「座る」回数で、グルーマーの行動では「見る」と「保定」回数において3年以上の者が有意に多かった（ $p<0.05$ ）。またグルーマーの「（イヌを）見る」時間において、3年未満の者が有意に長かった（ $p<0.05$ ）。グルーミング作業前半の唾液中コルチゾール濃度の増加率とグルーミング時間には、有意な正の相関が認められ（ $r_s=0.636$, $p<0.05$ ）、作業後半には有意な負の相関が認められた（ $r_s=-0.781$, $p<0.01$ ）。また、3年以上の者の「発声」回数および時間とイヌの「座る」時間に正の相関が認められ（ $r_s=0.90$, $p<0.05$ ）、3年未満の者の「発声」回数とイヌの「嗅ぎ」回数に負の相関が認め

られた（ $r_s=-0.828$, $p<0.05$ ）。これらのことから、グルーミングはイヌにとって負担になりうるものの、作業に時間をかけすぎない事が重要であり、迅速に手技をこなすグルーマーの適切な対処によってイヌのストレスを抑制している可能性が示された。

III. 総合考察

イヌは女性よりも男性に対して防衛性攻撃を示しやすい、イヌに対してのヒトの言語コミュニケーションにおいても男女間に差があるとされている。イヌの反応の違いや、霊長類を対象とした雌雄差に関する発達行動学的な研究成果などに代表されるように、性の観点のみならず、社会および文化的背景も少なからず影響し、グルーマーによるイヌの行動特性評価に反映され、捉え方の違いとなって表れたと考えられた。また、グルーマーの経験年数により、扱いやすい、扱いにくいと回答した犬種と行動特性が異なっていたことから、グルーマーは経験の積み重ねによって、経時的にイヌの行動特性の捉え方が変化すると考えられた。グルーミング作業を対象とした検証結果について、ストレス指標の一つであるイヌの唾液中コルチゾール濃度は、グルーミング経験年数が3年以上の者がグルーミングを行った場合、3年未満の者よりも低い状態であった。グルーミング経験が3年以上の者は、イヌを出来るだけ拘束せず、グルーミングにかける時間が少なかったことが、唾液中コルチゾール濃度が低値となった主たる理由であると考えられた。

本研究の結果から、経験年数が長いグルーマーは、イヌの行動特性を見極め、適切な手際と時間でイヌへの精神的負荷を軽減・回避するグルーミング作業を行っていることが示された。習熟度の高いグルーマーになるためには、長い経験年数を必要とするが、本研究の成果は、イヌのストレス回避を見据えた新たなグルーマー育成指針を示す基盤となるので、習熟度の高いグルーマーの早期育成が可能になり、ひいてはヒトとイヌの適切な共生方法を確立できる。

審査報告概要

ドッグケアの中でも、適切なグルーミングをイヌに行うことは、容姿や健康のためだけでなく、イヌとの良好な関係構築を願うヒトにとっても重要な課題である。本論文は、グルーマーならではの経験に基づくイヌへの接し方や行動特性の見極めに関する情報を得ることで、イヌとの理想的なつきあい方の提案に役立てることを目的

に、グルーマーに対してグルーミング作業を行う際の扱い方に関するイヌの特徴についてアンケート調査を行った。また、グルーミング中のイヌに対して生理・行動評価を行うとともに、グルーマーのイヌへの接し方を行動解析により定量化し解析を行った。その結果、扱いやすいイヌの特徴は、小型であることと、作業に対するイヌ

の反応性であること、男性は作業への明瞭な反応を、女性は動かないことを扱いやすいと判断していることを明らかにした。また、グルーマーの行動と作業時間はイヌのストレスに影響するが、経験に裏打ちされたイヌへの接し方が、イヌのストレス回避・軽減に貢献している可

能性を示した。これらの研究成果は、新たなグルーマー育成指針を示しており、ヒトとイヌの共生関係の向上に貢献するものである。

よって、審査員一同は博士（バイオセラピー学）の学位を授与する価値があると判断した。